

第 45 回創価大学・第 33 回創価女子短期大学卒業式「祝辞」(要旨)

デイルム・クレア・バーチンガー

世界の紛争地帯で活動する看護師
「怒りと貪欲」を「慈悲と寛容」の心へ
平凡な人々が世界を変える

「デイルム」の称号を持つイギリスの著名な看護師であるロンドン大学衛生熱帯医学大学院のクレア・バーチンガー博士が 18、19 の両日、東京・八王子市の創価大学を訪問。卒業式で祝辞を述べ、看護学部の学生と交流会を行った。

博士はディスレクシア（読み書き障がい）と闘いながら救急救命の看護師として経験を積んだ後、世界の熱帯雨林地域で医療に従事。その後、ICRC（赤十字国際委員会）で主に紛争地帯における緊急援助に長く携わった。2010 年には人道支援における貢献などが評価され、大英帝国勲章「デイルム・コマンダー」を受勲している。

現在は資源の乏しい地域や低所得国で働く医療従事者の指導にあたり、広く公衆衛生問題への認識を高めることに尽力している。

卒業式と交流会で博士は、自らの体験を通し、学生にエールを送った。卒業式での祝辞の要旨を紹介する。

◇

ICRC 時代、10 以上の戦争・紛争地域で支援に従事したバーチンガー博士。1984 年、大飢饉に見舞われたアフリカのエチオピアで、子どもたちのための食料補給センターの運営に携わった。

センターの外には連日、食料を求める人々の列。ある日、数えてみると、子ども 100 人以上の列が 10 列もできていた。しかし、手元には、わずか 70 食しか食料がなかった。

「受け入れられなかった子どもの大半が、数日後には餓死することを私は知っていました。当時、そのような規模で惨事が起きていることを、世界は知りませんでした。まさに悪夢そのものでした」

その後、BBC（英国放送協会）がエチオピアの状況や博士の活動などを報道。そこから世界に支援の輪が広がっていく。博士に対する社会の称賛も高まった。しかし博士は、救うことがで

Dame Claire Bertschinger（ロンドン大学衛生熱帯医学大学院熱帯医学看護専門職ディプロマ履修コースディレクター）

きなかった人々を思い、以来、約20年、エチオピアでの体験を語るができなかったという。

「私には疑問しかありませんでした。“なぜここまで、人々が苦しまなければならないのか”と」

次に博士は、アフガニスタンでの任務を述懐した。政府の統制下にあったカブールで、博士はムジャヒディン（イスラム戦士）に囲まれながら、銃弾の飛び交う戦線を救急車でぐり抜け、負傷者の待つ応急処置所に向かう。族長らとの停戦交渉にも臨んだ。

ある時、合議の場に招かれた博士に、一人の司令官が「あなたのような優しい女性が、どうしてこのような現状に変化を起こすことができると考えられるのか？」と尋ねた。

「私は一つの格言を思い出し、彼にこう伝えました。『水ほどに甘く、優しく、やわらかいものはない』『でも、水には山を動かすだけの力がある』」

その言葉に、司令官は「あなたの言う通りだ」と言って笑った。そして、「でもそれは我々の流儀ではないんでね」と付け加えた。

合議を終え会場を出ると、博士の乗ってきたクルーザーがチューリップの花びらで覆われている。博士の献身に対する戦士たちの感謝の意思表示だった。

「その光景に本当に驚かされました。状況は緊迫していましたが、そうした現状とは正反対ともいえる、全く“非戦争的”な優しさに満ちた光景でした」

この出来事を通して博士は学んだという。

「怒りや貪欲、ねたみといった一時的な感情で相手を描写するような状況にあっても、そうした感情は一瞬で慈悲や思いやり、寛容に変わることができるのです」

さらに博士は、アフリカ・ウガンダのある刑務所での経験を創大生に紹介した。そこでは受刑者たちが暴動を起こし、対話さえできない状態が数週間続いていた。

調停者として赤十字が刑務所内に入ることになり、博士も中へ。所内には栄養不良に伴う疾患等で苦しむ受刑者らがあふれていた。治療に当たり続けたある日、数人の受刑者が博士に、彼らにとって最も貴重な物——紅茶とチョコレートをお礼に差し出してくれた。

「私は彼らの行為に心から感動しました。私たちが人生で取る行動の一つひとつの背景となる思い、つまり、“心”の大切さを教えられました。そして、その思いを表す“与える”ことの大切さを知ったのです」

三つの体験を紹介した後、博士は続けた。

「戦争と人々の苦しみを終わらせ、世界を良い方向へと変えていく力は、皆さんや私のような平凡な人々に備わっている——私はそう信じています」

「本当に世界をより良い方向へ変えていきたいと願うのであれば、自分自身の人生をより良い方向へ変えることにも取り組まなければなりません」

「まずは自らの怒りの感情と向き合い、挑み、そこから英知や慈悲心を育むことから始めましょう。皆さんの創立者である池田大作先生は教えています。『一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする』と」

最後に博士は、アフリカの格言を紹介して話を締めくくった。

「皆さんは、自分がこの世界に変化をもたらすことができると思いますか?」「変化を起こすには自分の存在はちっぽけ過ぎると思う人は、“一匹の蚊がいる部屋に寝たことがない”なのでしょう」

(注) 日本語の要旨は、『聖教新聞』2019年3月21日付2面で報道された文章をご本人の了解のもと掲載をさせて頂きました。